

# 巻頭言

## 「のめり込み」について考える

全日本遊技事業協同組合連合会

理事長 青松 英和



先日、東京都遊技業協同組合と関東10県で組織される全関東遊技業組合連合会が連携して、傘下組合員の約4100ホールに、一ホール当り1000個のポケットティッシュを配布しました。このポケットティッシュの作成費用、配送業務等には、同じ遊技業界に生きる東日本遊技機商業協同組合(中村昌勇理事長)の皆様の強力なご支援、ご協力をいただきました。改めて中村理事長はじめ東遊商の皆様には厚く感謝申し上げます。

さて、今回配布されたポケットティッシュには、パチンコ・パチスロ遊技は適度に楽しむ遊びであることを訴えています。それにもかかわらず、のめり込み過ぎて、様々な問題を抱えるお客様や家族の相談先として、沖縄に本拠地を置く「リカバリーサポート・ネットワーク」(略称「RSN」)を紹介するチラシを挿入してあります。

ご存知のように「リカバリーサポート・ネットワーク」は全日遊連が2006年に全面的に支援して設立された特定非営利活動法人です。2011年からは業界14団体で構成される「パチンコ・パチスロ産業21世紀会」が全面的に支援する形で活動しています。

近年、パチンコ・パチスロ遊技に対する社会の見方が、従来と大きく変わってきて

います。かつて私たちの業は「身近で手軽な大衆娯楽」という位置付けで、人間が本来持ち合わせている「射幸心」を適度に満足させる、恰好の遊びでありました。どこにもあるというホールの身近な存在感とその時代々々に見合う無理のない金額で遊べ、運が良ければ家庭に賞品を持って帰れるという手軽な遊び故に一頃はファン人口3000万人という一大大衆娯楽産業であった訳です。

「のめり込み」は「依存」とも言い換えることができると思いますが、今私たちの業が直面している問題は、パチンコ・パチスロは遊びではなくギャンブルではないのかという社会からの見方です。ギャンブルに対するのめり込み、依存はかつて社会整備資本を充足する趣旨の下に始められた競輪、競馬、オートレース、モーターボートといった、公営ギャンブルにおいてのみ語られた言葉でした。「ギャンブル依存症」は公営ギャンブルにのみ生ずる問題である、私たちの遊技業界においては無縁のことと言っても過言ではない時期もありました。公営ギャンブルが「ギャンブル依存症」の問題とも相俟つて、社会から厳しい批判を受ける中で衰退していった代わりに、社会の発展や技術の進歩を背景にパチンコ・パチスロがその座を

とって代わるようになり、現在の遊技産業の隆盛をみるようになりました。しかし、その反面と言いますかその代償としてパチンコ・パチスロへの「のめり込み」「依存する」といった問題が、社会から指摘されるようになりました。

この問題が私たちの業界で論議される中で、様々な意見が出てきています。代表的な意見として、公営ギャンブルも含めて遊びは全て自己責任で行うものといったものや、時代の趨勢で一元パチンコのような低貸玉営業が主流の現在、その批判には当たらないといったものがあります。しかし、つい最近話題の事件となりました、大会社の社長のギャンブルへの「のめり込み」のようにたとえ遊びは全て自己責任としても会社の存立を危うくし、社員やその家族或いはその取引先に多大の迷惑を掛けるといったことや、いくら低貸玉と言っても毎日のようにホールに入り浸ることは「のめり込み」ではないのかと指摘される

といささか反論に窮することも事実です。そういう諸々の経過やご意見を受けてスタートしたのが、全日遊連が全面支援して設立された「リカバリーサポート・ネットワーク」の活動です。

世の中には私たちの業の他にも常に「のめり込み」「依存」のリスクが伴うものがある

ります。酒類然り、タバコ然り。只、それらの業は以前から「のめり込み」のリスクを啓発する活動を展開してきました。奇しくも酒、タバコといった過去何百年も昔から人間と共にあったものと同列に考えられることは誠に有り難いことです。パチンコ・パチスロがギャンブルとするならば、長い歴史を有するそれらと互することはできませんが、パチンコ・パチスロはあくまでも遊びです。適度に人間の射幸心を満たす娯楽です。決してギャンブルではないし、そうであってはなりません。それが民業としての遊技産業が立脚するところです。その観点から遊技産業もそれらの業に後することなく社会への啓発活動を行い、併せて真の「身近で手軽な大衆娯楽」としての道を模索し歩まなければ、社会のこの業に対する批判は止むことは無いと思います。

その昔、オランダの歴史家ホイジンガは人の定義として「遊ぶもの」と喝破しました。特に衣食住足りて、文化文明の進歩著しい現代において、様々な形態、方法で社会に「遊び」が供されていますが、パチンコ・パチスロがこれからも遊びの一分野で存続するためには、常にハード、ソフト両面において不断の努力を怠ってはならないと考えます。